

聖書：Iサムエル17：1～37a

説教題：生ける神の陣

日時：2016年9月25日（夕拝）

通常は旧約聖書を一章ずつ取り上げていますが、この章は長いため、2回に分けて見て行きたいと思います。今夕は37節前半までを見ます。さて今回イスラエルの前に現れたのはペリシテ人の代表戦士ゴリヤテです。彼についてのデータが4節から記されています。まず背の高さは6キュビト半。欄外の4を見ると、1キュビトは約44センチとありますから、計算すると286センチになります。私たちの間では180センチもあると相当に高い人で、世界では2メートル前後の人もいるようですが、このゴリヤテは3メートル近くもあります。別世界の人間です。また5節に、身に着けていたよろいの重さは青銅で5千シェケルとあります。欄外の5に1シェケルは11.4グラムとありますから、計算すると57キログラム。お米の大きな袋は30キロあり、あれを一つ抱えて歩くだけでも大変ですが、ゴリヤテはあれを2つ体にくくり付けても余裕に動いて戦うことができる。また7節に槍の穂先は鉄で600シェケルとあり、換算すると6.8キログラム。その他、青銅のすね当てを着けていた等、たくさんの装備をしています。そんな彼が出て来て、イスラエルに向かって叫びます。8節と9節：「おまえらは、なぜ、並んで出て来たのか。おれはペリシテ人だし、おまえらはサウルの奴隷ではないのか。ひとりを選んでおれのところによこせ。おれと勝負して勝ち、おれを打ち殺すなら、おれたちはおまえらの奴隷となる。もし、おれが勝って、そいつを殺せば、おまえらがおれたちの奴隷となり、おれたちに仕えるのだ。」11節に「サウルとイスラエルのすべては、このペリシテ人のことばを聞いたとき、意気消沈し、非常に恐れた。」とあります。サウルも背の高い人で、9章や10章では「民の誰よりも肩から上だけ高かった」とありました。しかしそんな彼も巨人ゴリヤテの前では小人同然だったのでしょうか。

しかしこの状況をどういう目で見るべきか、私たちは前の章でヒントを与えられて来たのではないのでしょうか。16章7節にこういう主の言葉がありました。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。・・・人はうわべを見るが、主は心を見る。」私たちはうわべのことに圧倒されやすいものですが、それよりももっと大切な見るべき視点がある。神の前ではそちらがより重要である。その目を持ってここに登場するのがダビデとなります。彼はこの時はまだ兵役に付く年齢に達しておらず、父エッサイから、兄さんたちの弁当を届け、安否を尋ねるように遣わされます。そして戦場にやって来た時、ゴリヤ

テが言いたい放題あざけりの言葉を発し、イスラエルがその前で完全に委縮し、震え上がっている様子を見ました。その時のダビデの言葉が 26 節にあります。注目すべきはこれは聖書が書き記したダビデの最初の言葉であるということです。人は口を開いて語るその言葉によって、その人がどんな人かを表します。その彼の注目すべき第一声がここにあります。26 節：「ダビデは、そばに立っている人たちに、こう言った。『このペリシテ人を打って、イスラエルのそしりをすすぐ者には、どうされるのですか。この割礼を受けていないペリシテ人は何者ですか。生ける神の陣をなぶるとは。』」

兄のエリアブはこれを聞いてダビデに怒りを燃やして 28 節でこう言いました。「いたいおまえはなぜやって来たのか。荒野にいるあのわずかな羊を、だれに預けて来たのか。私には、おまえのうぬぼれと悪い心がわかっている。戦いを見にやって来たのだろう。」彼の気持ちも分からなくはありません。他の兵士たちと兵役につき、ゴリヤテを前にしてさんざん頭を悩ませ、かつどうにもできない苦しさのただ中にあります。そんなところに末っ子がやって来て、「この状況は一体何なのでしょうか！」というような発言をしたなら、怒りたくもなるでしょう。しかしこの 17 章全体を見る時に分かることは、このダビデの発言は子どもの浅はかな発言ではなかったということです。むしろこの 26 節は、この 17 章における最初の信仰の言葉であるということです。これまでは長々とこの時の状況が記されて来ましたが、それらは言うならば「うわべに関する事柄」でした。しかしここに信仰の世界からの言葉があります。

このダビデの信仰の言葉から私たちが学ぶことは何でしょうか。二つのことに注目したいと思います。一つは彼が「生ける神の陣」と言っていることです。すなわち神は生きておられて私たちとともにいてくださると告白しています。偶像の神々は石や木でできていて命のない死んだ神ですが、聖書の神は生きてそこに臨在しておられる神です。イスラエル人はもちろんそのことを知り、口で告白していました。ところがゴリヤテとその言葉を前にした時、この信仰をどこかへ投げやっちゃってしまっていた。目の前のゴリヤテばかりに目が捕われ、圧倒されて、生ける神が自分たちと共におられるという最も大事な事実から目をそらして意気消沈していた。しかしダビデはうわべばかりでなく、もっと大事なことをしっかり見る目によって、この発言をしたのです。

もう一つ注目すべきは、ダビデがこれを神の栄光に対する熱心を持って語っていることです。そのことは直前の 25 節にある人々の発言との対比の中で一層浮き彫りにされ

ます。25 節で人々が語っていたことは「あれを殺す者がいれば、王はその者を大いに富ませ、その者に自分の娘を与え、その父の家にイスラエルでは何も義務を負わせないそうだ。」ということでした。しかしダビデの関心は、ゴリヤテを倒したらどんな褒美にあずかれるかということではなく、神の御名がそしられているということでした。この神に対する熱心は、彼がいかにか普段から神との生ける交わりに生きていたかを示しているのではないのでしょうか。

彼がどういう生活の中で神との関係を培われていたのかが、31 節以降のサウル王とのやり取りの中に記されています。ダビデはサウルに「このしもべが行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」と言います。しかしサウルから「それはできない。あなたはまだ若いし、あのペリシテ人は若い時から戦士だったのだから。」とたしなめられます。それに対してダビデは 34 節からこのように言います。「ダビデはサウルに言った。『しもべは、父のために羊の群れを飼っています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています。』」 羊飼いの生活というと、私たちはのどかで、牧歌的で、平和な世界を想像するかもしれませんが、実際はそうでなかったようです。獅子や熊が襲って来る危険な世界でもありました。しかしそんな中でダビデは生ける神と交わり、その力により頼んで歩んでいた。37 節を見ると、彼は自分が得た勝利の栄光を主に帰しています。「獅子や、熊の爪から私を救い出してくださったのは主である」と。前回、ダビデは他の兄弟たちがみなサムエルとの食事会にお呼ばれしている中、一人、羊飼いとして野に追いやられていたことを見ましたが、その野原での羊飼いの生活こそ、彼が信仰を培った場所だったのです。誰もダビデがそこでそんな学びをしていたとは知りませんでした。ダビデは羊飼いをする日常の中で、生ける神と交わり、その方と共に歩む喜びに生きていたのです。だからこそ神の御名が不当にそしられていた時、彼はただ黙っていることはできなかったのです。

私たちはここから次のことを思わされます。26 節のダビデの信仰の言葉は一朝一夕になされたものではなかったということです。その背後には、人の目には見えなかった神との交わりの生活があったのです。私たちの生活も野に追いやられていたダビデのように、誰からも注目されず、特別に取り上げる価値がないように思われる生活かもしれません。熊やライオンに出会う困難の多い生活かもしれません。私たちはそこでただつぶやき、愚痴をこぼしがちかもしれません。しかし実はそここそ私たちにとって大切な信

仰の訓練の場、また成長の場なのではないでしょうか。遭遇する様々な課題を前にして生ける神を仰ぎ、この方の助けを頂いて一つ一つ乗り越える歩みを重ねてこそ、巨人ゴリヤテを前にしても、ダビデのように語る事ができる信仰へと導かれることになるのです。

あるいは逆にこう考えても良いと思います。私たちはすでにこれまでの生活において、様々な神の助けと恵みを経験して来たのではないのでしょうか。ただ神のあわれみと導きによって色々な困難を乗り越えて来た経験があるのではないのでしょうか。それを現在の課題に当てはめるといことです。今までも幾多の困難の中で生ける神が私を助け導いてくださった。その目と信仰を持ってゴリヤテを前にしても考えるのです。私たちの前にも色々なゴリヤテが現れるでしょう。とても太刀打ちできない大きな課題が目の前に立ちだかることがあるでしょう。しかしそれを見てシュンとなるのではなく、これまで神がくださった学びを生かすのです。これまで私を助け導いてくださった神は、ここでも私を助け導いて下さると、今の状況に当てはめて信仰告白する。そうして新たな戦いへと立ち向かって行くべきではないのでしょうか。

こうしてダビデはいよいよゴリヤテとの戦いへと進みます。その場面は次回のお楽しみといたします。今日は最後に二つのことを申し上げて終わりたいと思います。その一つ目は、このダビデに関する記事はどういう目的をもってここに記されているのかということ。これは単に私たちの戦いを励ますための一つの模範に過ぎないではありません。このダビデの記事は、より大きな視点では、やがて神が私たちに与えてくださるまことの王イエス・キリストを指し示す予表として描かれています。この時のイスラエルは絶望的な状況にありました。最初の王サウルは退けられ、当初の期待は打ち砕かれた状況にありました。そして今、巨人ゴリヤテの前でイスラエルは打つ手なし。一体どのようにして将来の明るい展望を持つことができたのでしょうか。しかし主は前の章でご自身の御心にかなう新しい王に油を注ぎ、そのダビデはここで一人、信仰に立つ発言をして戦いに向かおうとしています。神はこのようにしてご自身の器を用意し、私たちの先頭に立つ王を備えて、ご自身の民を救い、祝福して下さるのです。私たちはこのように私たちの救いのために行動して下さる恵みの神がいることを見上げて御名を賛美し、また神がついに遣わしてくださったイエス・キリストに目を注いで、その方に従って行きたいのです。

もう一つのことは、私たちは神の救いの行動を感謝しつつ、私たちもお霊的な戦いへと召されているということです。私たちはただ今日の章に記されているダビデのお手本に鼓舞されて、それぞれの戦いへ向かって行くではありません。神はこのダビデが指し示すまことの王イエス・キリストを送ってくださいました。私たちの戦いはその方のもとでの戦いです。キリストは私たちのために十字架と復活へ進み、悪魔と罪と死に打ち勝ってくださいました。私たちの戦いは、このことを信じ、このまことの王に従う信仰の戦いです。この世にあってはなお様々な戦いや困難が私たちにはあります。しかしイエス様は私たちのために死んでくださり、すべての罪の呪いとさばきを受けて復活してくださったので、どんな災いや苦しきも今や私たちに究極的な害をもたらすことはできません。最後の敵である死に対しても、私たちは「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」と勝ち誇ることができる。私たちは意気消沈せずに、そのように信仰告白をして神の戦いを戦う者でしょうか。

イエス様は言われました。「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」パウロもローマ書8章最後の部分で「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか。苦しきですか。迫害ですか。飢えですか。裸ですか。危険ですか。剣ですか。」と問い、こう言います。「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」またこうも続けています。「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」私たちは様々な困難の中で、うわべだけを見て意気消沈するのではなく、生ける神が共におられて、その方がダビデが指し示すイエス・キリストを送ってくださり、私たちを導いてくださっていることを信じて戦いたいと思います。そして私たちがそうするのは単に私たちの幸いのためだけではありません。私たちが参戦しているのは神の栄光のための戦いです。私たちの生活を通して何よりも神に栄光が帰されることを願って、この身をささげる「生ける神の陣」としての歩みへ今週も遣わされて行きたいと思います。